

I. 理念・哲学：「本気の事前防災」 →詳しくは、別稿『私が考える「本気」の事前防災』を参照

- (1) 「ビフォーX」：徹底した「事前」の意識をもって、つまり、今口にしていないことは「アフターX」では決して発言しないとの覚悟をもって、「ビフォーX」の今、防災について語り構想し行動すること。
- (2) 「考えるのもおぞましいこと」：たとえば「だれ一人取り残さない」を貫徹できない状況や、「有事」との同時発生、原発事故などについて、事後つまりそれが起きてからではなく、事前の今語り構想し行動すること。
- (3) 「命を守ることの困難」：普及・啓発においては、命を守るためのノウハウ（だけ）でなく、命を守ることの困難（割り切れなさ）を伝えること、また、教え諭すのではなく、市民が自ら考え決断し行動する仕掛けを。

II. 「3つの防災」の区別とプライオリティの決断 →次ページの図を参照

一口に「防災」と言っても、毛色の違う「3つの防災」が混在し独立に進行中。「防災1」：数千人の犠牲者を百人オーダーにする防災、「防災2」：数百人をゼロに近づける防災、「防災3」：数万人を絶対に出さない防災。これらが別々の施策として別の省庁（部局）で展開。「防災庁」は優先度を決断すべき（相互調整ではなく）。

III. 総合地域施策としての「事前防災」の司令塔役

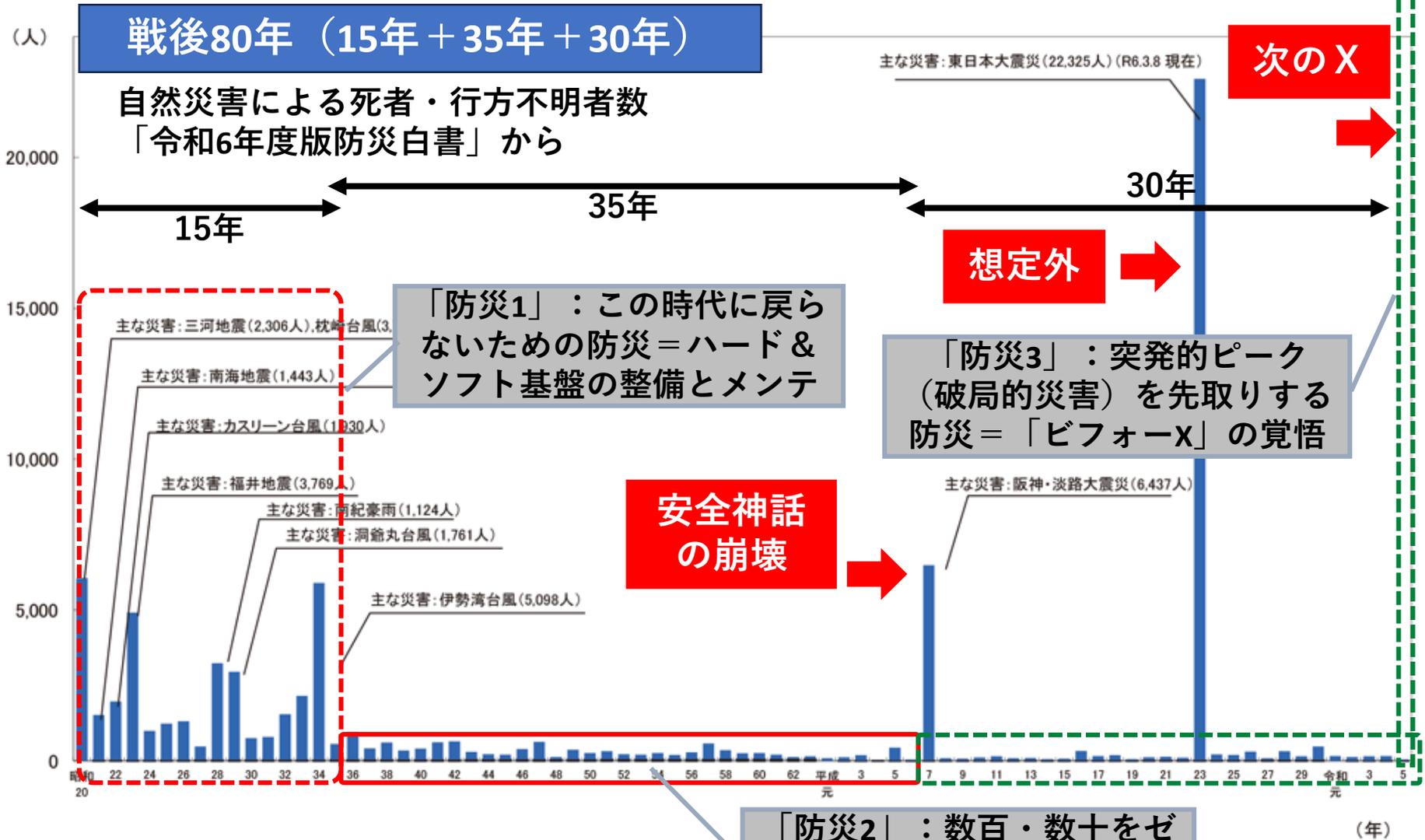
事前防災にも司令塔機能は必要。事前防災は本気になればなるほど、逆に「防災オンリーマター」ではなくなり、「総合地域政策」となる。そのための構想力と舵取り役を防災庁には期待したい。以下は一例。

- (1) 「防災×健康」（～厚労省）：「動けるからだが一番の防災グッズ」（高知県四万十町）。高齢化100%でも住民全員が歩ければ、理論上、避難行動要支援者はゼロ。個別避難計画に代表される「防災×福祉」のコラボをさらに前進させた「防災×健康」で「ふだんとまさかの二刀流」を追求。
- (2) 「防災×観光」（～国交省・経産省）：「防災ツーリズム」。日本一高い避難タワーを中心にした日本一の防災で日本一のまちづくり（高知県黒潮町）。災害に備える以前に過疎化・人口減、地場産業の衰退といった「目前の課題が先」の声に答える防災でないの実効性なし。地域活性化×防災で「ふだんとまさかの二刀流」。
- (3) 「防災×環境」（～環境省）。「防災×脱炭素×福祉：地域マイクログリッド構想」（高知県黒潮町）。エネルギーの面で「自立」することで、そもそも「孤立」が問題にならない自治体（コミュニティ）を作る構想。導入したEVを弱体化する域内交通問題対策に使うなど、ここでも「ふだんとまさかの二刀流」を志向。

IV. 主体性を唱えるのではなく醸成する普及・啓発の仕掛けの主導機能

「主体的に防災に取り組みましょう」で主体性が生まれるなら苦労なし。手法と工夫が必要。たとえば、隣接分野の公衆衛生には、塩分摂取量、血圧、喫煙量など、個人でモニタリング可能で努力目標になりうる指標が多数。他方、防災業界は、耐震化率、自主防結成率など、国や自治体がモニタリングする（気にする）指標ばかり。手前味噌としては、「避難スイッチ」、「防災ゲーム：クロスロード」、「津波避難訓練支援アプリ：逃げトレ」。すべて、市民一人一人が考え、決断し、行動することを支援するツール。教え諭すツールでは決してない。

参考図：3つの防災：基本的な成功と例外的なしかし深刻な失敗



注) 令和5年の死者・行方不明者は内閣府取りまとめによる速報値
 出典：昭和20年は主な災害による死者・行方不明者（理科年表）
 昭和21年～昭和27年：消防庁年報、昭和28年～昭和37年は警察庁資料、昭和38年以降は消防庁資料をもとに内閣府作成